

対談：田村俊介 × 土田ヒロミ

親子の関係

事務局：5会期目の田村さんです。最終回ですね。では、持ってきていただいた写真を見ながら話しましょうか。

田村：はい。応募作品では、応募しに来た日まで撮影して提出したので、その次の日からの分を持ってきました。最近は暑いから、服を脱いでる写真が増えてきましたね。

土田：田村さんは、80年生まれですか。24歳ね。写真はどんな風にして始めたんですか？

田村：高校を出てから、渋谷の日本写真芸術専門学校へ行きました。3年制コース。

土田：じゃあ、卒業して2、3年経ってるんだ。今回のシリーズを撮り始めたの、大体いつからですか？

田村：去年の7月ですかね。でも、毎日撮り始めたのは9月だったと思うんです。

土田：お父さんを撮っていますよね。なぜ？なぜ、被写体として、お父さんを撮ろうと思った一番大きな理由はなんだろうね？

田村：やっぱり、この親父を毎日これだけ撮るのは、自分しかいないっていうのが一番大きいと思うんですけど。

土田：毎日ね。じゃあ、毎日撮れるから親父なの？それとも親父を撮ろうとして毎日になっていったの？どうなんだろう？

田村：その、親父も62歳になって、定年して大分たって、体力的にも、まあそんなに弱ってはいないと思うんですけど、そして死も近い……、近いとは言えませんが、死んだらもう撮れないなって思って、残しておきたいというのがあります。

土田：僕がひとつ上だから、まさに同世代（笑）。なんか、親父を見て、微風でも蠟燭の火がふっと消えそうな、そんな肉親としての不安感みたいなものを、ちょっと写真に撮ってみようかなって思ったのかな？父に対する思いみたいなものを。

田村：そうですね。この歳まで、趣味っていうものがほとんどなくて、中学出て15歳からずっと工場と働いて。だから、本当に何もやることなくなったら、どうするんだろうっていう風に退職する前から心配していました。

土田：それで7月から気まぐれにバラバラ撮り出して、9月になって本格的に毎日撮ってみようって変わっていった。毎日撮る事と、お父さんをちょっと気持ちよく撮るのと、全然質が違うと思うんだけど、なぜ、毎日撮る方向に変わっていったんだろうね？

田村：ホームページをやっているんですけど、実はそこで、「デジタルパラス」ってタイトルで毎日載せてるんです。これをやっていたおかげで、この前、沖縄にいる兄貴から電話がきて「見てるよ」みたいな会話があって、嬉しかったです。

土田：毎日写真を追加して、大変な作業だね。お母さんは、いつ亡くなられたんでしたか？

田村：僕が高校入る直前に、9年くらい前です。

土田：あなたにとって、お母さんがいなくなったって事が、肉親としての親父の寿命を強く感じたきっかけになったのかな？

田村：そうですね。やっぱり親父が母親が死んだ事がすごい辛いみたいで。しょっちゅう思い出しては、飲んじゃ泣いてたんですよ。

土田：ああ、そうなんですね。僕はこれ見ながらね、もう少し批評的な視線で親父を見てるのかなと思ったんですよ。男が社会的に退潮してやる事がなくなって、それで、家の周辺でもごもごしている。そういう生き方を見て、ちょっと批判的に「親父、何してるんだよ」という感じで見ているか、もしくは、日常を生きるということはどういう事を考えさせられて撮ってるかと思ってたんです。実際は、結構愛に包まれたところから視察してるんだね。

田村：はい。ただ親父の日常を撮ってるだけであって、こういう風な写真になっているのは、親父の日常がこうだから。自分の感情とか、そんなに意識はしてないんです。表現というより、記録に近いですね。



土田：お父さんは淡々と日常をこなしているわけですけど、その日常を同じく淡々と見ているあなた。毎日写真を撮ることで、お父さんと向かい合ってる息子の関係が見えてくるのが、この作品の面白いところだと思うんですね。一枚一枚は単純なイメージだけど、それを積み重ねることで質的な転換がおきて、老いていくことで失っていくものの問題、そしてそれを眺める家族の問題、そういった現代が浮かび上がってくるんですよ。ところでお父さんのこれ、目線がきてる写真ってあまりなくて、カメラがそこにあるってことを、あまり自覚してない、むしろあなたを無視してるというか……。

田村：それは、このサイバーショットで撮ってるからかもしれないですね。手のひらで隠れるくらい小さいですから。

土田：そうか。この小さいカメラね。それはあるかもしれませんが。いや、これだけ撮られてることを意識しないでいるモデルってのも凄いなと思って。

田村：ただ、自分は、このカメラで親父だけ撮ってるわけではなくて、親父も一応、僕が写真やってることも知ってますし、パシャパシャ撮る子なんだなっていう風に思われるように、家の中でキャラ作りしてるんです。今日も撮りたくもないのに、テーブルの上にバナナをのけて撮ってみたりとかして。煩わしく思うかなってことは、なるべくやめるようにしていますし。

土田：それで一年も作業を続けていって具体的にホームページに載せていくじゃないですか。自分の中で変わっていったこととか、親父に対する感情の変化とかがありますか？

田村：変わっていったことですか……、普段は一緒にいても、親子ってそんなにお互い意識することってないじゃないですか。でも、これで写真撮って見返してみると、親父の日常がすごい自分に迫ってくるというか。こんなに毎日、同じ事してるのか親父！みたいな事が、実際目の前に、非常に具体的に出てきた。一度、親父が寝てる時に僕が出かけて、で、次の日の昼間に帰ってきたら、同じこたつの位置で同じポーズのまま（笑）。おんなじだ！って思って撮ったら、2日続けて似たようなカットになったんです。

土田：割合寝てる写真が多いんですが、酔っ払って寝てるのか、早くから寝ちゃうのか、それはなんでだろう？

田村：それは、親父が昼間から寝てるから。今日も昼間からビール開けてたんですけど、もう言うの面倒なんです。一時期は5時から12時の間しか飲んじゃダメとかいろいろ決めてたんですけど、全然ダメなんでもうほっとこうかと思って。

土田：この写真見ながら、寝ながらタバコ吸ってて怖いなと思った。結構家の中にいろんなものがばらばらしてるから、危ないな一と思って見ましたけどね。結果的に寝てる写真が多く選ばれているのは、物理的に寝てる時間が多いという理由と、もう一つ、寝てるとどこか死人に似てるからじゃないかな。立って動いてると意味があったり、作業が写ってるんだけど、寝て止まってる動かなくなっちゃうとオブジェになっちゃう。

田村：そうですね。安らかな顔に見えますよね（笑）。親父が毎日飲んで心配な時期とかは、夜帰ってきたら親父の布団を見て、布団が上下してるのを見て、ああ動いてるって安堵して。

土田：親父の死を見つめているって感じですね。それをあなたの中で予感として意識化する。この親父は死んでしまうかもしれないという予感みたいなものを感じてるのかもしれない。寝顔を撮るということは、親父の死んでるのか、生きてるのかって思うくらいの瞬間を撮っているということなのかもしれない。もう少し優雅に寝てればいいんだけどな、本当に（笑）。



作品撮りはコンセプトに基づいて

土田：この親父さんの写真以外には、あなた自身は何をやっているの？ 写真表現としては？

田村：基本的にコンセプトに基づいて、作品を作ることが多いんで、だから、カメラを常にぶらさげて、カシャカシャ撮ってるってのは、作品という意識はほとんどないんです。作品の場合は、コレを撮りにいこうと思って、出かけて、撮りに行って、という作業ですね。それで、8月に個展をするのが、「LANDSCAPER」というタイトルで、意味は「風景を作る人」、造園家っていう意味の単語なんですけど。風景は、偶然が重なりあってできていて、誰かがそれを作ってるんじゃないかなって、風景を構成している要素を意識して撮影しています。

土田：ああ、面白いですね。風景を撮っているのか人を撮っているのか分からないくらいのポジションで撮ってるんだと思いますが、僕と割と近い事やってるかもしれませんね。僕、今カラーでやってるのは、昔の「砂を数える」シリーズの鳥瞰的なものを撮ってるんです。そういう意味では風景か、風景じゃないか分からないくらいの距離で撮っているんですが、非常に近いかもしれませんね。

田村：あと、虫とか小さいモノの死体を撮ってるシリーズで、日常にある死を追ってるんです。普通に写真に撮っても、生きてるのか死んでるのかも分かりにくくなるし、本当に死体かどうかのも分からないと思って、それで、いくつか自分が作った偽物を入れてるんです。こっちは「ドールズ」というタイトルです。

土田：結構うまいタイトルつけてますよね。同じように死体ばかり撮ってる人もいますけど、「死体考1」とかいうタイトルをつけがちですよね。そこをドールって読み替えるのは、あなたの頭のいいところで、そういう作業があなたの中にあるってことはいい事かもしれない。切り替えはどうしてるの？ LANDSCAPER撮っても、虫がいいたら撮れる？

田村：撮ります。でも、どっちかに集中してた方が、やっぱり撮りやすいですね。

土田：そうだと思うよ。やっぱり視線の投げかけ方が違うから。僕と似てますけど、いくつかテーマを並列にやっていく人は、あなたの世代では多くいるのかな？ 珍しいタイプなのかな？

田村：どうなんですかね？ 僕の周りにはあんまりいないですけど。

土田：一つのことをやっていた方が認知されやすいからね、今は。未だ珍しいんだよね。我々は珍種か。

表現の手段と場

事務局：デジカメとフィルムで違いはありますか？

田村：よく、デジカメだからこういう風に毎日撮ったり、たくさん枚数を撮ったりできるようになってきたっていうじゃないですか？ それはフィルムとデジカメの違いじゃなくて、コストの面でできるようになっただけなのに、それをデジタルのおかげだ、みたいな感じがあるのが、ちょっと変な話だなんていつも思ってるんですけど。

土田：コストの問題は、当然あると思いますが、もう一つは、一瞬考えてみたんですけど、撮ったものをその場で見られるって事は、継続していく勇氣にはならない？ これフィルムだとずっと毎日撮っててね、撮れてるはずのものが現像するまではフィルムとして潜在しているだけじゃないですか。そうじゃなくて、とりあえず撮ったら確認する。この関係は、当然写真の表現に影響してくるはずです。

田村：それは、ボラロイドを撮るのと同じことではないですか？

土田：ボラロイドと同じなのかもしれないけど……。結果的にプリントアウトすればね。だけど、この機械のレベルで保存されている状態はね、ある意味、自分の見たものを記憶として明快に記録している訳で、デジタルカメラがもってる機能は、脳の働きに近いじゃないですか？ この機能は、表現の質を変えていくだろうっていう予感はするんです。記憶をたどるような感じで、戻ったり来たり。そういうものが、こういう継続的な仕事をやる上でも、なんらかのプッシュになってるのかなっていう気もしないでもないですけどね。

田村：そうですね。やりやすいついていうのはあります。

土田：これ一日に何枚ぐらい撮るの？

田村：1枚の時もありますし。やっぱり親父と一緒に過ごす時間が長い時の方が、数が多くなります。だから1枚の時もあれば、100枚の時もある。



土田：僕も毎日自分の顔を撮って「エイジング（Ageing）」っていうシリーズとしてまとめているんだけど、僕の場合は一日1枚でいいわけですよ。でも、あなたの場合には、もう少ししたらだと、日常的に親父を見つめる限りのものを拾っておこうというわけなんだね。で、具体的には、どういうセクションをするんですか？ 例えば、寝てる時とその前に飯食ってる時に撮ったとすると、さて、そのどちらかを選ぶ理由に何か根拠があるの？

田村：まずホームページに載せる時の話をする、結構小さめのサイズでたくさん並べて見せてるので、小さくても分かる写真を選べるんです。だから、基本的に親父が写ってればいいと思ってるんです。展覧会ではもちろん大きくなるんで、他のカットも入れていこうとは思ってるんですけど。ホームページでは出来ないことをやるうと思っていて、親父の動画があるんで、親父の一人しゃべりの音声を会場中に響かせたいんです（笑）。

土田：この世代は、展覧会だけじゃなくてこういうホームページも、発表メ

ディアとして獲得していくでしょうね。

田村：毎日の表現とかは、やっぱりホームページが一番ですしね。

事務局：お父さんは、ホームページに아가っていることも、今回の展覧会のことも知らないんですよ？

田村：言わない方が面白いから、言ってないです。やめろとは言わないと思ってんですけど。他の人からばれるのはしょうがないけど、自分からはあえて言わないです。特に普段、僕がどんなことしてるとか、そういう話もしないので。今回、展覧会の告知用に親父の顔とURLが入ったポケットティッシュを作ったんです。自分の知らない所でティッシュになって、いろんな人が持って帰ったら面白いかなって思って。

土田：これ、はっきりいって使いづらいな（笑）。しばらくトイレに飾って置いてこうかな。

作業の継続、終わり方

土田：写真を見ていると、お父さんはがむしゃらに生きてきた人という感じがするね。あまり他者との関係を意識しない生き方をやってきたような人の感じがするんです。まあ、家庭の事情ばかり聞いてちゃうけど（笑）、お母さんが亡くなれる前は、もう少しぴちっとしてた？ サラリーマンだしね。

田村：でも、母親がずっと入院していたんで、自立はしていたんです。俺は男の割には料理がうまいだろう、ってよく言ってるんですけど……、おいしくない（笑）。

土田：この作業が完結するのは……、まあ、親父が息をひきとるまでってのが一番いいんだけど（笑）。亡くなるってのは決定的な終わり方の一つだと思いますけど、30年も生きる可能性もあるわけで、あなたの方が先かもしれないわけですから。そうすると、この作業を延々と続けていくとどういう事が起きるんだろう？ あなたとしては、親父との見つめあう関係を、今後どんな風にしていくんでしょう？

田村：どういう風にしていこうっていうのはないですね。流れに身をまかせ感じ。多分、出来る限り続けていくとは思んですけど。

土田：他のテーマでもそうですが、写真をやり出すと、やりだした事にひばられちゃう所がある。親父を撮る事をいったん離れてみるって事が起きるとすれば、死別以外どんな場合だろう？



田村：ちょっと今は分からないですけど、自然とそうなる時が来れば離れると思うんです。僕の気分が、親父が「やめてくれよ」って、「お前、ホームページに載せてるらしいな！」って。一応始めは、撮ってもずっと同じだろうなって思いもあって、一年が区切りになるかもしれないって思っていたんですけど、だんだん親父も親父なりにちょっと生活を変えていこうと、花とかいじりはじめたりして。だから、何がこの先起こるか分からないから、その時に自分もまだ撮っていたいなって思えてきたんです。何かが起きた時のために。

土田：まあ、この写真の面白さは、そういうドラマチックなものがなくて、あまりにも変わらなさすぎる日常が綿々と続いているところだけだね。それと向かい合ってるあなたの姿が見えてきて、非常に面白いんですけど。ただ今の話だと、撮るだけじゃなくて、もっと違う転換がおきるかもしれないって事を、どこかで期待しながら撮ってるってことなのかな？

田村：期待まではしてないけど、その「かもしれない」って事があるだけでいいんですよ。やめちゃったら、もう終わりじゃないですか。ここで。

土田：なるほどね、とりあえず撮ってることで安心するってことはあると思

うんだ。僕なんかもそうですけど、とりあえず出かけて、どんな写真でもいいから一枚撮っとくと安心するんですよ。

田村：僕もカメラはいつも持ち歩いてるんですけど、近所のコンビニとかちょっと行く時も、カメラないとすごいドキドキして。この間、なんかすごいのあったらどうしようって。

土田：そういう意味では、あなたの表現の体質は、日常生活者としての自分と写真を撮る自分がまったく日常的に並列にあるんだね。あなたは、毎日、結婚しても嫁さんを振り向かずには写真を撮っていくというタイプなんですかね。

田村：中毒、じゃないですかね。そしたら、同居しなきゃ駄目ですね。

土田：さて、例えばお父さんをこれから、毎日撮っていくぞって自分に言い聞かせるのは結構大変なことですけど、それとはまったく関係なく、非常にコンセプチャルな作業が自然にあなたの中から生まれ出て、「LANDSCAPE」や「ドールズ」などが出てくるという、いいバランスで実現しているというのは、とてもいい事ですね。持続力もあるみたいですし。自分の中で衝突、分裂しないで、いい形で進んでいければと思いますね。さて、お父さんはどうなっていくだろうね。ずっと撮ってきて、どう思います？ このまま、日常を延々と続けていくんでしょうか？

田村：しばらくは変わらないですよ。本当、再婚とかしてくれたら……。

土田：面白いね、写真的には（笑）。

田村：（笑）。写真的にもそうですけど、僕としても安心。

土田：結婚で全然今まで見たことがない顔が出てきて、顔が生き生きとしたりしてね。こういう向かい合っていく関係を撮り続けていくと、親父自身のフィジカルな、まあメンタルなものもそうですが、変化がもっと出てくることもあるでしょうし。もう一つは、あなたと親父の、男としての年齢の問題。男として、合わせ鏡じゃないけど、鏡としての親父を撮ることとかなり意識的に自分が見えてくるかもしれない。発表するかしないかは別の問題として続けられたらいいですね。

田村：はい。頑張らずに、頑張ります。

2005年5月10日（リクルートGINZA7ビル）